

原水禁広島大会

盛岡峰南高等支援分会 松田 長悦

私は広島を歩き、被爆者の声を聞き、広島ของ苦しみを見て感じて、戦争と原爆、さらに福島原爆事故の姿を思い起こし、生きていくことへの思いを自問自答していました。

72年前、広島ของ8月6日8時15分は、今回訪れたようにとても暑く、路面電車を使い仕事場へ向かう人、学校ではしゃぎ回る子どもたち。人々が朝の日常生活を迎えていたそのときに、突然飛行機から落とされた一発の爆弾（原爆）の凄まじい光と高熱によりすべてが焼かれ、殺され、死んでいった広島の人々は、二度とこの青い空、蝉の声、両親や子ども・孫の顔、恋人の顔を見ることができず、一瞬にして死んでしまったのです。あらためて原爆だけではなく、戦争というスイッチを押した日本のリーダーの愚かさに、朝から「むらむら」と怒りがこみ上げていました。

今回は、特にも7月7日に国連で核兵器を持ち、戦争や脅しに使うのを全面的に禁止する「核兵器禁止条約」が制定されて初原爆の日です。

しかし、日本はこの条約に参加せず、加盟の意思も見せないままこの日を迎えたのです。原爆を落とされた広島。長崎の人々に寄り添うことのできないこの国のあり方を無視することはできません。今すぐに条約に署名することを強く要望します。

高教組原水禁ナガサキ平和の旅

盛岡みたけ支援分会 高橋 幸

私がこの旅の中で印象に残ったのは、長崎原爆資料館でした。子どもの頃、祖母から聞いていた戦争の話、テレビや本などで見たり知ったりした情報とは違い、その生々しさと悲惨さに胸が苦しくなりました。

原爆資料館に展示された当時の写真を見ると、荒れた土地、人々の表情など、3.11の東日本大震災も思い出さずにはいられません。震災当時、私は沿岸の学校に勤務しておりました。避難所や遺体安置所



の空気、なぎ倒された建物や木々が広がる光景、悲しみと途方に暮れる人々などを忘れることはできません。核兵器が投下された1945年と現代とは状況は違うかもしれませんが、たくさんの人の命を奪った戦争と震災とは、私の中で重なるものがありました。

私たちは震災を防ぐことはできません。その被害を最小限にとどめる努力しかできないのですが、核兵器や戦争は私たちで防ぐことができます。核兵器や戦争で命が奪われることがないよう、祈る気持ちが強くなると同時に、私たちに何ができるのだろうかと考えさせられました。旅の中では“私たちは被爆者から話を聞ける最後の世代である”ということが何度か話題となりました。被爆者から話を聞くことが難しくなっても、知ったことを次の世代へ「伝えていく」ことができます。私自身も今回の旅で知り、感じた核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを伝え、繰り返さないことを祈りたいと思います。併せて、震災を経験した者として、震災のことも伝える役割があるのではないかと感じています。